

### 大自在

新国立競技場の建築デザインを手掛ける隈研吾さんは、阪神大震災や東日本大震災などでビルや家が崩れ、流されるのを目にして大きな敗北感を味わった。建築は時代を映す鏡。今必要なのは「突出したのではなく、周囲に溶け込み、心に残る建築」という▼「みんなが喜ぶ建物ができればそれでよし」となるのが設計の面白さだとも。以前、本紙に載った。先ごろ、こちらにも「それでよし」と、声を出したくなるような個性的な建設論文集が届いた。将来、建築士や現場監督、大工の棟梁などを目指す高校生、専門学校生の作品だ▼県建設業協会が35年前から人材確保の狙いで募集し、ここ何年か審査員として加わっている。今回は414人の若者が建設業で働く夢・挑戦・魅力を書きつづけた▼「県知事賞に輝いたのは「笑顔を生む仕事」の題で建設業に携わることの喜びを強調した佐藤直喜さん(科学技術高1年)。子どもから高齢者まですべての人に笑顔が生まれる建物を造りたいと意欲を燃やす佐藤さんだが、気掛かりは人手不足▼そこで提案したのが、子どもから大人まで楽しめる「今と昔の建設業体験館」の建設。古い街並みを再現し、昔の暮らしが体験できるコーナーを設け、反対に最先端の技術を見学、体験できる場をつくるなどアイデア満載の施設だ▼いわゆる「3K」といわれ、若手の就業が減り、高齢化の進む業界だが、地図に残る(建設業の)仕事”に夢を追う多くの若者たちがいる。論文を読み進めば、未来の建設現場で躍動する彼、彼女が見えてくる。